

琉球大学学術リポジトリ

小学校外国語活動(仮称)の方向性～「教育課程部会の審議のまとめ」を読み解く～

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学教育学部附属教育実践総合センター 公開日: 2008-11-10 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大城, 賢, Oshiro, Ken メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/7827

小学校外国語活動(仮称)の方向性

～「教育課程部会の審議のまとめ」を読み解く～

大 城 賢

A New Direction of Foreign Language Education in Elementary Schools in Japan: Reading of the Interim Report from Central Council for Education

OSHIRO Ken

はじめに

2007年度中に告示が予定されている「小学校学習指導要領」では、高学年において週1時間程度の外国語活動(仮称)の導入が予定されている。具体的な目標や詳細な指導内容については、学習指導要領の告示を待たなければならぬが、新しい学習指導要領の骨子となる「教育課程部会におけるこれまでの審議のまとめ」(以下「審議のまとめ」という)が2006年11月7日に公表され、小学校における外国語活動(仮称)の概要が明らかになってきた。

本稿では、「審議のまとめ」を主な資料として取り上げ、現行の「中学校学習指導要領(外国語科)」と比較しつつ、2008年3月に告示が予定されている「小学校学習指導要領(外国語活動)」(仮称)の目標・内容について検討する。

中学校学習指導要領(外国語)と比較する理由は、比較することにより小学校外国語活動(仮称)と中学校外国語科の同異が明確になると考えるからである。

「審議のまとめ」を読むと、今回導入が予

定されている小学校外国語活動(仮称)は中学校外国語科への円滑な接続が意識されている。小学校外国語活動(仮称)は教科での位置づけではないが、中学校外国語科とまったく別物というわけでもない。小学校の外国語活動(仮称)と中学校の英語科はどのように繋がるのかという観点からも、両者の比較は意義のあることである。さらに、「審議のまとめ」で用いられている文章を誤解なく読み解くためにも、中学校学習指導要領(外国語科)と比較することは有効である。学習指導要領で用いられる文言は特別の意味を持っていることが多い。例えば「審議のまとめ」で使用される「言語や文化」という文言は、中学校の学習指導要領(外国語科)でも使われており、その意味するところは同じである。「中学校学習指導要領(外国語)」と比較することによって、「審議のまとめ」で用いられる文言を正しく読み解くことができるものと思われる。

1. 目標の検討

「審議のまとめ」では、小学校の外国語活

動（仮称）の目標および実施に際しての配慮事項を以下のように記述している。

小学校段階では、小学生のもつ柔軟な適応力を生かして、言葉への自覚を促し、幅広い言語に関する能力や国際感覚の基盤を培うため、中学校段階の文法等の英語教育を前倒しするのではなく、国語や我が国の文化を含めた言語や文化に対する理解を深めるとともに、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図ることを目標として、外国語活動（仮称）を行なうことが適当と考えられる。（下線部は筆者）

このような外国語活動（仮称）を行なうに当たっては、身近な場面やそれに適した言語や文化に関するテーマを設定し、ALTの活用等を通して、英語でのコミュニケーションを体験させるとともに、場面やテーマに応じた基本的な単語や表現を用いて、音声面を中心とした活動を行い、言語や文化について理解させることを基本とすることが適当である。（下線部は筆者）

目標の記述は、次の三つの柱に分解することが可能である。

- ① 主としてコミュニケーションに関すること
- ② 主として文化に関すること
- ③ 主として言語に関すること

後ほど詳しく述べるが、①、②および③は並列ではなく、①が最も大切な目標になっており、②や③の目標は①を補完する関係になっていると考えられる。

ところで、現行の中学校学習指導要領（外国語科）の目標は以下のように示されている。

外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、聞くことや話すことなどの実践的コミュニケーション能力の基礎を養う。

『中学校学習指導要領解説：外国語編』（以下『解説書』という）によると、中学校の目標も次の三つの柱から成り立っている。

- ① 外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深める。
- ② 外国語を通じて、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図る。
- ③ 聞くことや話すことの実践的コミュニケーション能力の基礎を養う。

『解説書』は①～③の柱について、さらに以下のように詳しく説明している。

①は、外国語の学習において、その言葉のもつ仕組み、意味、その働きがわかるようになること、さらには、そのことばの背景にある文化への理解を深めることの重要性を述べたものである。これらはコミュニケーションを図るうえでも重要な働きをするものである。また、そのことを通して、同時に自分たちの文化への理解の深まりが期待される。

②は、実践的コミュニケーション能力を育成するためには、コミュニケーションへの積極的な態度を身に付けることが重要であることを述べたものである。従来、生徒たちは一定の基本的な知識を身につけていたとしても、それを活用できなかったのは、積極的に自分の考えを相手に伝えようとしたり、相手の考えを理解しようとしたりするなどのコミュニケーションを図ろうとする態度の育成が十分でなかったことによる。②の目標を設定したのはこのためである。

③は、外国語による実践的コミュニケーション能力の育成を掲げたものである。この目標を最重要項目として最後に置くことによって、その点を強調したものである。「実践的コミュニケーション能力」とは、単に外国語の文法規則や語彙などについての知識をもっているというだけではなく、実際のコミュニケーションを目的として外国語を運用できる能力である。

小学校の外国語活動（仮称）の目標と中学校の英語科の目標を比べてみると共通点と相違点がある。この同異を明らかにすることによって、小学校の外国語活動（仮称）の目標を正確に読み解くことが可能になると考える。中学校の目標との比較を試みながら、小学校の外国語活動（仮称）の目標について順次詳しく検討していきたい。

（1）コミュニケーションに関すること

「審議のまとめ」では小学校においては「積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図ることを目標とする」と述べている。前述したように、現行の中学校学習指導要領の目標の一つが「外国語を通じて、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成」である。小学校外国語活動（仮称）の目標とほぼ重なっている。しかし、よく見ると、ほぼ重なってはいるが、考え方は全く同じではない。

中学校外国語科の場合、態度の育成は基本的な知識を身につけることが前提になっている。「解説書」では「生徒たちは一定の基本的な知識を身につけていたとしても、それを活用できなかったのは、コミュニケーションを図ろうとする態度の育成が十分でなかったことによる」としていることから、その事がわかる。しかし、小学校外国語活動（仮称）の場合は「中学校段階の文法等の英語教育を前倒しするのではなく」という前文の後に続

けて、「積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図ることを目標とする」という文言が続いている。これは、小学校と中学校では明らかに重点の置き所が異なっていることを表している。中学校では「一定の知識」を身につけることに重点が置かれるが、小学校では、「知識」に重点があるのではなく、むしろ「コミュニケーションを図ろうとする態度」に重点がある。「知識（＝文法規則や語彙）」よりも「コミュニケーションを図ろうとする態度」を重視するということは、具体的にどういうことを意味するのかについては後述する。

（2）文化に関すること

『解説書』によると、中学校の学習指導要領（外国語科）における「言語」は「その言葉の仕組み、意味、その働き」（下線部は筆者）と定義しており、学習者の学習対象言語を指していることがわかる。「文化」についても同様で、「その言葉の背景にある文化」（下線部は筆者）、つまり、英語が学習言語ならば、英語を母国語あるいは公用語にしている国々の文化を指している。

「審議のまとめ」では、「国語や我が国の文化を含めた言語や文化」と表現している。つまり、中学校外国語科においては「その言葉の背景にある文化」が対象であるのに対し、小学校外国語活動（仮称）は「我が国の文化を含めた文化」ということになる。もちろん、中学校でも我が国の文化と比較して指導することはあると思われるが、それは、あくまで学習対象言語の背景にある文化をよく理解させるために行われることである。ところが、小学校外国語活動（仮称）においては、もう少し積極的に「我が国の文化」を学習内容として取り入れることを意図していると思われる。

「審議のまとめ」では「幅広い言語に触れることが国際感覚の基盤を培うことに資するものと考えられることから、英語を原則とし

つつも、他の言語にも触れるように配慮することが望ましい」と述べている。したがって、英語以外の言語の背景にある文化にも触れることが望まれている。小学校外国語活動(仮称)においては「文化」を扱う範囲が広がっており、「我が国の文化や、英語圏の文化や、その他の文化」を含むと理解したほうが良さそうである。

なお、中学校学習指導要領(外国語)や、「審議のまとめ」では「言語」と「文化」は「言語や文化」というように、一括りで記述しているが、本稿においては便宜上、「言語」と「文化」というように、分けて論じている。

(3) 言語に関すること

「言語」というのは、前述したように「言葉のもつ仕組み、意味、その働き」のことである。「審議のまとめ」でもその意味で使っている。しかし、「審議のまとめ」は「中学校段階の文法などの英語教育を前倒しするのではなく」という文言とともに、配慮事項として「英語でのコミュニケーションを体験させる」ということが述べられている。

言葉を使うということは、「その言葉の仕組み、意味、その働き」を理解していなければならない。それは小学校でも同じである。しかし、「中学校段階の文法などの英語教育を前倒しするのではなく」という文言と「英語でのコミュニケーションを体験させる」という文言を考え併せると、小学校では「文法などの知識」を与えることよりも「コミュニケーションの体験」が優先されることがわかる。「文法などの知識」よりも「コミュニケーションの体験」が優先されるとはどういうことかについては例をあげて後述する。

「審議のまとめ」に記された文章に基づき、小学校における外国語活動の目標を三つの柱に分解して読み解くことを試みてきたが、筆者なりにまとめると以下ようになる。

- ① コミュニケーションに関すること
 - ア 外国語でのコミュニケーションを体験させる。
 - イ 積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図る。
- ② 文化に関すること
 - ア 我が国や外国の文化の理解を深める。
 - イ 外国語が使われる場面に必要な身近な文化を理解する。
- ③ 言語に関すること
 - ア 外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませる。
 - イ 国語を含めた言語の大切さや豊かさ等に気付かせ関心を高める。

2. 具体的な指導の場面における三つの目標の関係

「審議のまとめ」から小学校外国語活動(仮称)の目標は、①コミュニケーションに関すること、②文化に関すること、③言語に関することの三つの柱から成っていることを述べた。本節では、この三つは、具体的な指導の場面でどのように理解したらよいのかについて考察する。

菅(2006)は、コミュニケーション、スキル、言語や文化面の関係について、以下のように述べている。

コミュニケーション能力の向上をめざして、スキル面、言語や文化の面を組み合わせると、どのような内容になるだろうか。例えば、「自己紹介/自分の好きなものについて伝える」という言語の使用場面と言語の働きを設定したとしよう。この場合、目標を「自分の好きなものについて、相手に伝えることができる」とする。コミュニケーションの面では、

「英語を使って、自分の好きな食べ物について話し合ったりすること」であり、言語や文化の面では、「日本語になった言葉（外来語）に気づいたり、他の外来語について学習したりすること」等となる。一方、スキル面では、「appleやorangeなどの単語を通して英語の音声に触れたり、日本語と英語との音声の違いなどにも気づかせること」となる。そして、I like apples. などのような表現を使って、積極的に人前で、英語を使って、自分の好きなものについて発表できれば、目標が達成されたことになるであろう。

菅の考えを援用して、前節で示した三つの目標（①コミュニケーション ②文化 ③言語）の関係を具体的に説明したい。

前述したように、小学校の外国語活動（仮称）で重点が置かれるのは①のコミュニケーションである。そこで、まず「自分の好きなものを伝える」というコミュニケーションの視点から菅の事例を検討してみる。

例えば、児童が“I like…”までは言えたが、apple という単語がどうしても思い出せなくて、黒板に「りんご」の絵を描いて、“I like this.”と指差して相手に伝えたとする。この場合、「自分の意図を伝える」という目的は十分達成されている。小学校の外国語活動（仮称）でいう「コミュニケーションを体験する」という目的も、この時点では十分達成されていると考えられる。

これまでの日本の英語教育の中では、どちらかというと、appleという単語が分からなければ、もう次に進めないと思ってしまう生徒が多かった。「コミュニケーションを体験させる」とは、たとえ部分的には分からない単語があっても、どうにかして相手に自分の意図を伝えるということである。そこが、小学校外国語活動（仮称）の基本的な考え方はないだろうか。

次に②の目標である「文化」という視点からこの事例を考えてみたい。apple という単

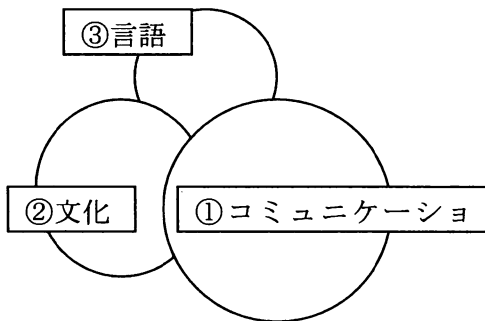
語が出てきた場合、例えば、りんごの食べ方などを児童に聞いてみるとよいだろう。もちろん、日本では、皮をむいて食べるか、皮を洗って丸かじりするなどの食べ方が一般的である。児童もそのように答えるであろう。しかし、世界中どこでも同じ食べ方をするかといえば、そうでもない。例えば、英米では焼きりんごにして食べたり、アップルパイにしたり、また、アップルソースに加工することなども行なわれている。教師がそのようなことに言及すれば、児童は食文化（＝異文化）についても学習することになるだろう。

身近な果物の例を通して、児童は、同じ食材でも料理の仕方や食べ方が異なることに気づく。このことから、世界には様々な食文化があることを理解することになるだろう。ただ単に「apple＝りんご」と覚えるだけでなく、言葉の裏側にある文化に言及することによって、英語活動（仮称）は、異文化に対する理解という点からも重要な役割を果たすことが期待されている。

最後に、③の目的である言語の視点からこの事例を考える。「コミュニケーションを体験する」というのが小学校外国語活動（仮称）の第一の目標であるから、この場合、apple という単語は捕捉的に指導することになる。ただし、「審議のまとめ」では「音声面を中心とする」と述べられているので、文字としては書けなくても良い。「聞いて分かる」や「英語で言える」程度でよいと考えられる。発音するときは、/p/の音や/l/の音に注目させ、日本語の音とは異なることに気付かせることができれば、広い意味で言語に関する関心も喚起することができるであろう。

このように考えてくると、小学校の外国語活動（仮称）は①を中心とするが、②は①を発展的に補い、③は①を補足的に補う関係になっていることがわかる。三者は異なる概念であるが、決して背反するものではなく、むしろ補う合うものであると考えた方がよい。この関係を図示すると以下ようになる。

【図1】



最も大きく描かれた円が最も重要な「コミュニケーション」、次に大きい円が「文化」、そして最も小さい円が「言語」ということになる。中学校の英語教育でも、この三つの要素は必要であるが、重点の置き所は異なっている。外国語活動（仮称）では、あくまで、「コミュニケーション」が最も重要であり、それを補完する形で「文化」や「言語」があると考えてよいのではないと思われる。

3. 小学校で「コミュニケーション」を重視する意義

「審議のまとめ」を読み解くことによって、外国語活動（仮称）では、「コミュニケーション」が最も重要な目標になることを論じてきた。このことは、外国語学習のプロセスを考えると望ましいことであると筆者は考えている。以下に、その理由について述べたい。

(1) 方略的能力（コミュニケーション・ストラテジー）の観点から

「文法や語彙」よりも「コミュニケーション」を優先させるとどのような事が起こるであろうか。前述した apple という単語が分からずに、「I like this.」と黒板にリンゴの絵を描いて自分の言いたいことを伝えた例を取り上げて考えてみたい。外国語学習の初習者は当然のことながら「文法や語彙」の知識

が非常に少ない。少ない状況で「コミュニケーション」を優先させると、「語彙」が不足している学習者は、ジェスチャー等の非言語的な手段に頼ることになる。実は、ジェスチャーなどの非言語的方略は、コミュニケーション能力を構成する重要な能力の一つである。

青木（1992）は、日本の学習指導要領のコミュニケーション能力の考え方は、Canale（1983）の考え方が基盤になっていると述べている。Canaleによると、コミュニケーション能力とは、①文法能力（文や文章を作り出す能力）、②社会言語学的能力（発話の適切さを判断できる能力）、③談話能力（文レベルではなく文章の構成に関わる能力）、④方略的能力（語彙力などの不足等を補ってコミュニケーションを続けていく能力）の4つの構成要素からできている能力である。現在では、コミュニケーション能力の定義として、この考え方が最も広く使われている。

方略的能力の種類や詳細については研究者の間で異なっており、同じストラテジーであっても別の名称を与えられているものもある（Tarone；1977, Corder；1981, Faerch and Kasper；1983, 平野；1986）。詳細な議論は紙幅の関係で避けるが、コミュニケーションを遂行するために必要とされる主なストラテジーは①Code switching（日本語を使用する）②Paraphrase（言い換える）③Word coinage（目標言語に存在しない語句を作る）④Gesture, mime, sound imitation（ジェスチャーやものまね）などである。前述の apple の例は、④のストラテジーを使ったことになる。

大城(1993)は、中学3年生に、実際にアメリカの中学生と自由な交流活動をさせた後、「現実のコミュニケーション場面で最も障害になったものは何だったか」というアンケート調査をしている。その結果をみると「単語がわからないために話せなかった」と答えた生徒が80%にのぼっている。具体的な例として「甥という単語が分からずに、会話が止まってしまった」という例も紹介しているが、これなどは、my brother's son と言い換える

ことができれば何とかコミュニケーションを続けることができたのではなかったかと思われる。

和田 (1991) は、これまでの日本の英語教育で最も配慮が欠けていたのは方略的能力であると述べているが、大城の研究にも示されているとおり、日本の中学生は知らない単語や知らない表現があると、そこでコミュニケーションを中断してしまうという傾向がある。つまり、コミュニケーションの場面において、「文法や語彙」に頼りすぎて、方略的能力を使うことができなくなっている。なぜ、このような事になったかと言えば、日本の中学校では、「コミュニケーションを体験する」ということが不足していたからではないだろうか。始めから「語彙や文法」が重視されすぎたために、方略的能力を使うチャンスを失ってしまったといってもよい。

Canale (1983) は、コミュニケーション能力の4つの構成要素を「静的」に捉えているが、Savignon(1983) は、この4つの構成要素は学習の段階でその割合が変化するものであると「動的」に捉えている。彼女のコミュニケーション能力モデルは、【図2】のような逆ピラミッド型をしている。学習者の位置は、初めはピラミッドの先端(図ではピラミッドが逆さになっているので下のほう)である。初めは、文法的能力(語彙を含めて)、社会言語学的能力、談話能力が皆無に近い。あるのは方略的能力だけである。したがって、初めの段階では方略的能力の占める割合が大きい。学習が進むにつれて(下から上にあがるにつれて)、文法能力やその他の能力などの占める割合が大きくなっていく。それに併せて方略的能力の占める割合が減少する。しかし、方略的能力はどの段階でも等しく必要な能力であるため、初めから終わりまでその幅は変わらない(これは、文法的な知識はどんどん増えて大きくなっていく、例えば方略的能力の一つであるジェスチャーが上手くなるということは考えられないことを表している)。

今回導入される外国語活動(仮称)が、

「文法(語彙)」よりも「コミュニケーション」を重視するというのは、Savignonのコミュニケーションモデルの考えからすると極めて自然なコミュニケーション能力獲得への学習のプロセスである。Savignon は、もちろん日本の現状を考えてこの図を作った訳ではないが、【図3】のように、日本の学校レベルを横線で入れると、まさに、コミュニケーション能力の視点から見た日本の英語教育のモデルが現れる。

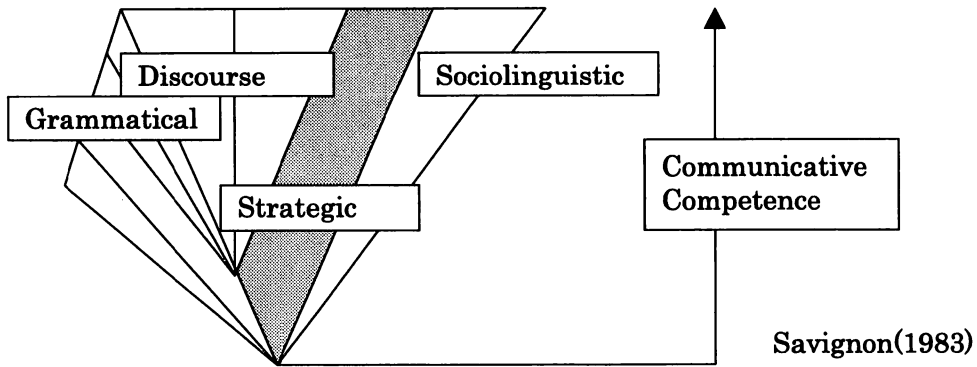
松川(1997)は、穂積北中学校で、2年間英語を学んだ生津小学校出身の生徒と、英語を学んでこなかった他校出身の生徒とを、中学校1年の2学期末に情意面・スキル面の両方から調査をしている。スキル面では、1対1の個人面接調査を行っているが「“What is your blood type?”のように未知の単語を含む質問についても、反応の速さ、内容の適切さは生津小学校が勝っていた。生津小学校の出身者は、なじみのない言葉に対しても、相手が何を伝えようとしているのかを推測し、自分なりに答えてみようとする姿勢を持っていることが分かる。このような態度や能力は一種のコミュニケーション方略と解釈できるものであり、生津小学校の英語がコミュニケーションの基礎づくりに力を入れた成果と見ることができる」と述べている。松川の研究は、小学校段階で「コミュニケーション方略」の指導に重点を置くことによって、中学校でもその能力・態度が生かされていることを示している。

(2) 「意味」を重視する外国語学習の観点から

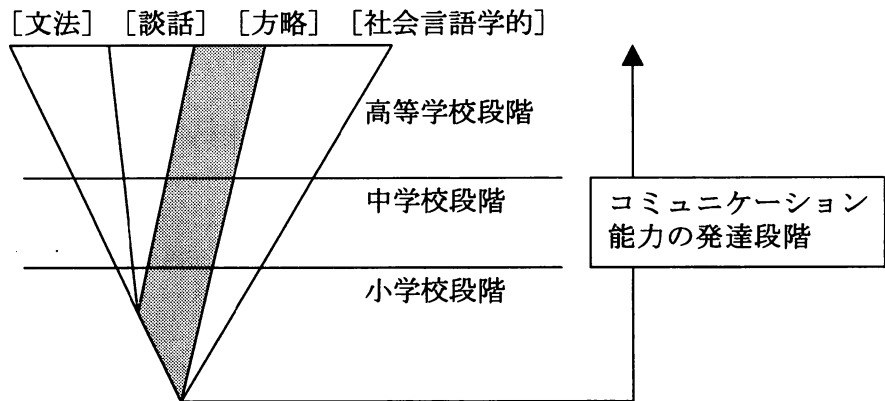
筆者は、英語の授業は「形式(文法)中心から意味中心へ」の考え方を基本にすべきではないかと考えている。中学校や高校の授業を覗いてみると、依然として文法・文型・語彙などに重点を置いた授業が多いように思われる。授業で行なわれるアクティビティも、どちらかというと指導した文法事項や文型の定着

【図2】

THE COMPONENTS OF COMMUNICATIVE COMPETENCE



【図3】 (Savignon:1983の逆さピラミッドを単純な逆三角形に改変している)



を狙ったものが多く、活動そのものに目的があるものは少ない。そうなると、本来言葉の持っている「意味」に生徒の注意が向かなくなってしまう。結果的に、言葉はコミュニケーションの道具であるという意識もだんだん薄れていくことになり、英語の学習も面白くなっていく。喩えて言うと、このような授業は、「食器についてはいろいろ分かったけれど、その食器はいつも空だった」というようなものである。

小学校の英語活動を参観すると、「自分と

同じ誕生日の人を探そう！」などのように、活動そのものに重点を置いたものがほとんどである。"When is your birthday?"と質問した子どもの耳は、次の瞬間、相手の発する言葉に集中している。そして相手が自分の誕生日と同じ"October."と答えようものなら飛び上がって喜ぶが、違う月だと、すっかり落ち込んでしまう。普段は何でもない"October"が、コミュニケーションを重視した活動では、とたんに子どもたちの喜びや落ち込みに直結する重要な「意味」を担った言葉となってい

く。

これらの活動では、児童の関心は常に「意味」に向いている。限られた語彙や表現ではあるが、豊かなコミュニケーションが展開されている。喩えていうと、紙の皿を使っているが、そこには児童にとって大好きな料理がしっかり盛り込まれているようなものではないだろうか。

小学校では、紙皿を使用してもよいから、まずは美味しい料理を楽しませ、中学校や高校では家庭で使う普通の皿から、レストランで使う様々な種類の皿へと使える皿を増やしていけばよいのではないだろうか。忘れてならないのは、料理があるからこそ皿が必要だということである。

小学校では「コミュニケーション」を重視することになるが、先に料理をしっかり味わわせるといことは、学習を継続させる意欲という点からも、好ましいことである。

おわりに

小学校の英語活動は、現在、「総合的な学習の時間」を使って9割以上の小学校が何らかの形で実施している。これらの小学校においては、小学校外国語活動（仮称）の中身がどのようなものになるのか非常に関心が高い。「総合的な学習の時間」に実施される英語活動の中身については、それぞれの学校の判断に委ねられてきた。したがって現状では様々な形の英語活動が実施されている。今後は、小学校外国語活動（仮称）として、学習指導要領にその中身が明示されることになる。それに伴い、それぞれの小学校は、これまで実施してきた英語活動の中身を再検討する必要がある。本論文が、間もなく導入される外国語活動（仮称）の中身を理解する助けになり、総合的な学習の時間で行なわれている英語活動から外国語活動（仮称）へのスムーズな移行に役立つならば幸いである。

「審議のまとめ」は、指導目標や内容のほかにも、指導者の問題、指導法の問題、テキス

トの問題、指導者研修などにも言及している。今後の小学校外国語活動（仮称）の展開を考えると避けて通れない問題であるが、このことについては今回論じることができなかった。別の機会に譲りたい。

【引用文献】

- 青木昭六(1992)「Communicative Competence (伝達能力)とコミュニケーション能力」『英語教育』開隆堂2月号
- 大城 賢 (1993)「積極的に英語を話そうとする態度を養成する授業の工夫：コミュニケーション・ストラテジーを中心に」琉球大学教育学部附属中学校紀要
- 菅正隆(2006)「小学校における英語教育の内容」『小学校英語セミナー』明治図書
- 中央教育審議会・初等中等教育分科会・教育課程部会(2007)「教育課程部会におけるこれまでの審議のまとめ」文科省
- 平野絹枝(1986)「教室内コミュニケーションの指導と評価—コミュニケーション方略を中心として」『中部地区英語教育学会紀要第16号』中部地区英語教育学会
- 松川禮子(1997)『小学校に英語がやって来た！カリキュラムづくりへの提言』アブリコット
- 文部省(1999)「中学校学習指導要領解説：外国語編」東京書籍
- 和田稔(1991)「コミュニケーション能力」『英語教育』開隆堂2月号
- Corder, P(1981) "Strategies of communication" in Corder, *Error Analysis and Inter Language*, Oxford University Press
- Faerch, C&C. Kasper(eds) (1983) *Strategies in Interlanguage Communication*, Longman
- Tarone, Elaine(1984) "Teaching strategic competence in the foreign-language classroom" in Savignon, S. & M. Berns (eds), *Initiatives in Communicative Language Teaching*, Addison Wesley